

我が家の愛犬

中部徳洲会病院 大城 吉則



我が家の愛犬、アメリカンコッカースパニエルのランは、14年前、本土に住む義理の弟から譲り受けた。空輸便で夜中に到着し、暗いケージの中からつぶらな瞳でじっと私たち家族を見つめていたあの姿は、今でも鮮明に覚えている。不安そうなその眼差しに、「私たちになついてくれるか」と心配になったことを、昨日のことのように思い出す。

アメリカンコッカースパニエルは、一般的に人懐こく、無駄吠えも少なく、賢い犬種とされている。感受性が豊かで、飼い主の気持ちや表情をよく理解するともいわれる。ディズニー映画『わんわん物語』のヒロインとして登場したこともあり、ペットとして高い人気を誇る犬種だ。我が家に来たランも例外ではなく、穏やかで人懐こい性格で、すぐに家族に馴染み、次第に家庭の中心的存在となっていった。当時、思春期で家族との会話が減っていた長女も、ランが来てからは表情がやわらぎ、以前より明るくなったように感じた。

当初の私は、「犬は外で飼うものだ」という古い考えにとらわれており、室内で飼うことには抵抗があった。しかし、仕事から帰って玄関のドアを開けると、家族の誰よりも先にランが駆け寄ってきて、尻尾を振りながら出迎えてくれる。ときにはうれしさのあまり“うれション”をしてしまうこともあった（犬は興奮し、うれしくなると尿をする習性があるようである）。また、私がソファでくつろいでいると、いつの間にか寄り添って一緒に横になっている。そんなランの健気な行動が、自然と私の心をほぐし、「我が家の一員、四番目の子ども」として、かけがえのない存在になっていった。

少し前までは、散歩が何よりの楽しみだった。

特に日曜日の散歩は私の担当で、宜野湾市の海浜公園はランのお気に入りの場所だった。芝生の上を軽やかに歩き、私が走ると、風になびく耳を揺らしながら全速力で追いかけてきた。ときには公園の鳩を見つけて、猟犬の本能が目覚めたかのように身を低く構え、一気に飛び出すこともあった。あの躍動感に満ちた姿は、今でも私の心に鮮明に焼きついている。

しかし今では、そうした姿を見ることはほとんどなくなった。散歩に出てもリードを引くことはなく、私の後ろを小さな歩幅でついてくる。途中で立ち止まり、歩くのを拒むこともある。見た目には我が家に来た頃とそれほど大きな変化はないが、その動きから老いをひしひしと感じるようになった。さらに、左脚にできた腫瘍の治療のため、動物クリニックへ通うことも増えてきた。

ランは今年で15歳。人間に換算すれば80歳を超える高齢だ。ジェットブラック（純黒）のふわふわで艶やかな被毛や、つぶらな瞳は若い頃のままだが、最近では動きがすっかりゆっくりとなり、ソファで寝そべって過ごす時間が増えている。

犬の寿命は人間よりはるかに短い。ランも高齢となり、手のかかることが多くなってきたが、妻や娘は変わらぬ愛情で丁寧に世話をしてくれている。これまでランは、我が家の中でさまざまな話題を提供し、常に会話の中心にいた。ランの残された時間が長くないことを、家族みんながどこかで感じてはいるものの、それについて言葉にすることはしない。私もこれからも変わらず、家族の一員としてランと穏やかな時間を大切に過ごしていきたいと、しみじみと思うこの頃である。